

み仏のまなざし胸に古都の秋

溪水

古寺巡礼の旅中吟であろうか。京都、奈良方面の旅は中高年者だけでなく、若者にも人気がある。明治の東京・遷都まで、日本の政治文化の中心であり、日本人の精神世界、美意識を育んで来た地でもある。諸寺の仏像は単なる象徴としての物理的存在ではなく、人の心に問いかけ、人生の大事な局面において何らかの暗示を与え、慈しみと癒しを与える精神的存在である。仏教の教義そのものに対する理解力や信服度については、もちろん個人差はあるが、日本人の精神的風土の根底に仏教的死生感があることは否定できない。「み仏のまなざし」という平明なフレーズの中に、「仏」への希求感が現れている。「古都の春」では情緒に流れてしまいが、内省的な秋の句として、「古都の秋」と捉えることによつて掲句は眞事に結実した。

終電まで職場の句会林火の忌

貞勝

身近に見聞するところでは、近時の結社では定例句会の後すぐに懇親会に移ることが多い。懇談が楽しいから句会に来るといふ参加者も多い。これはこれで俳句が多くの人によつて受け入れられている証左でもあるから一概に否定するものではないが、筆者が俳句を始めた頃は、俳句そのものが楽しくて(もちろん作句の苦しさはあったが)、席題などによる句会が二回、三回と行なわれるのが通例であった。大野林火氏は母校の先輩俳人である。作者が林火指導句会に出席しておられたかどうかは知らないが、「終電まで・・・句会」のフレーズに、初学時代より強く持ち続けておられる俳句に対する熱情・愛着が読み取れる。

コスモスを透かし向うに過去の見ゆ

幸枝

秋の花、藤の花、向日葵などを透かして人や何かを見たという句立ては、既に多くの俳人が行なっている。従来句では、作者に見られたものは、現実そこに存在する人や物体であるが、掲句の作者は、現実には見えないものを見たのである。風に揺れるコスモスによつて作者の記憶が喚起され、過去にあった情景がフラッシュ・バックのように目の前に現れたのであろう。「コスモス」と上五に置かれているので、想起されたのは、作者にとって肯定的な楽しい出来事であったのかも知れない。俳句は見えないものも詠めるツールなのである。

はかどらぬ話につるべ落しかな

幸

「釣瓶落し」は「泰山木の花」、「勤労感謝の日」などと同様に字数と配置において、幹旋する言葉の選択が難しい季語である。掲句の作者は「はかどらぬ話」を選び取ったことによつて、俳句表現として成功した。言われてみれば、「はかどらない話にうんざりしているが、こちらからは打ち切れない」というもどかしい状況は、日常経験するところであるが、「釣瓶落し」との取り合わせは絶妙である。日が暮れた後も作者は、その話に根気よく付き合つてあげたのであろうか。

風抜くる本陣跡や猫じやらし

秀一

「風抜くる」であるから、この本陣跡は記念館などの余分な建屋のない更地であつて欲しい(作者の説明によればその通りであるとのこと)。本陣跡と記された杭一本だけの空き地を風が吹き抜け、その風によつて猫じやらしが揺れている、という客観的事実の提示のみによつて、その土地にまつわる歴史、そして人間の営為のはかなさを感じることが出来る。客観写生に徹した叙情性の深い作品である。

長生きもほどほどがよし白芙蓉

与史

人生の運命のこのころからの自然な嘆きであろう。天命の許す限りにおいて淡々と生きることに関心した作者の心情は、「白芙蓉」という季語を握ることによって、的確に表白されている。より多くの人々が「ほどほどが良い」という心境に至れば、この熾烈な競争原理が緩和され、もう少し穏やかな社会が生れるものと痛感させられる。

新涼や玉溢るることピアノの音

ヤエ子

秋に入ったばかりの爽やかな風の中に混じるピアノの音が「玉」のようである、と作者は捉えている。この感性がよい。ここで使われている「玉」は、「玉(たま)」のような赤ちやんの玉なのか、あるいは「翡翠などの宝石を意味する玉(ぎよく)」の玉なのであろうか。いずれにしてもピアノの音色の清明さが感じ取れる。

ギャラリーの水彩画良し紅葉かな

真三

とあるギャラリーをのぞいたとき一枚の水彩画に出会った。その絵のメインテーマが「紅葉」であったかどうかは、ここでは問わない。作者はその水彩画に目にとまったことを契機として、「紅葉」が脳裏に浮かんだのであろう。

筆者の考えでは、絵の中、写真の中の「紅葉」を詠んだものであれば、その「紅葉」は季語として用いられていることにはならない。掲句は「水彩画が紅葉の絵である」とまでは言っていない。水彩画は季語の「紅葉」を引き出すための端緒に使われているのに過ぎないと思いたい。

綯雲堅き握手を交しけり

溪水

作者が綯雲の下で誰と握手をしたのかについて述べておらず、連想し得る手掛かりも置かれていない。「具体的な物に即して句意明確に詠め」という一般的な俳句論から言えば、曖昧性のある俳句とされるかも知れない。しかしながら、この俳句論は原則的には正しいが、例外もあり得る。

俳句は僅か十七音で構成される短詩形であるから、読者が連想可能な範囲内において、省略的表現が許される。掲句は、この省略が許される境界線内の句であるのか、既に境界線を越えてしまった句であるのか。筆者は、前者であるものとする。

作者が全部を言い切っていないことによって余情が生れ、読者に対して鑑賞の幅が広く与えられている。筆者には、若くして共に出陣する友人と両手を堅く握り合つて、心に再会を誓う作者の姿が見えて来る。

乱れ萩艶めいてをり尼の寺

文枝

掲句は、出句時の短冊の誤記により互選では無点であった(誤記と分かっているが、出句短冊通りの状態で判断する、との櫻蔭俳話会のメンバーの厳正な態度には感服)。右記のように正しく表記されたものとして鑑賞すると、尼寺に見た乱れ萩が艶めいているとの把握は、俳味があつて面白い。